

第100回「萩句会報告」 (順不同)

日時 2017年11月13日(月) 14時～17時

兼題「ゆず湯 柚子湯」

- 川合素山 ○青みかん誰か剥いてる昼の寄席
老班の手の指鳴らす柚湯かな
新酒汲む無聊ほぐれる流しかな
鮫鱈なべ語り尽せぬ旅の枷
- 保井寶正 ○茶の花や我の書斎を支配せり
木枯や都会の孤独吹きとじよ
柿落葉錆朱の余生 宥^{ゆる}しけり
柚湯でてへのへのもへじなぞる子等
- 佐久間喬 ○秋雨のまつすぐに降る七七忌
過ぎし日に住まひし町の暮早し
柚子代わりグレープフルーツ漂ふ湯
焼き秋刀魚煙たっぷり日本かな
- 丸山酔宵子 ○事ならぬ悔ひを残して柚子湯かな
仄かなりうなじ辺りに柚子かほる
霧晴れて呼子のイカの睨むなり
湯上りの襟元合わす後の月
- 菊地崇之 ○この道や押葉誓いし冬紅葉
冬晴や木立を透かす竹箒
天竺の阿羅羅仙人ゆず湯かな
クリスマスレクイエムの音色放つ
- 吉田啓悟 ○梵鐘のひびき拡がり山眠る
豆腐笛遠ざかりゆくしぐれ町
娘の小言聞きながら落葉焚
果てしなき夢をもとめてゆず湯浸む
- 青木英林 ○小春日や思ひ巡らす老いの先
待ち人の来らず社の神無月
一年は未だ終らぬよ冬至風呂
木枯や賑はひの増すアーケード
- 後藤勝彦 ○群れ離れ見張りのごとく彼岸花
黄落やバルト三国染めあげる
キャッスル
古城跡 人影あまた星月夜
香消ゆ三晩続きの柚湯かな

- 山本草風 ○柚子湯出て鏡に見せる裸身かな
我が姿鏡の中で秋の駒
冬夕焼空に少しの嘘もなし
遠景色風に色つく紅葉かな
- 佐伯兵庫 ○あんこ鍋隣の部屋に押されぎみ
明日見えぬ二人の別れ冬紅葉
ひれ酒に会議は踊るガード下
冬至湯に虫の居場所糺しけり
- 渡辺鯨波 ○凡庸な五体労り柚子湯かな
柚子湯出てアランドロンに逢ひにゆく
血糖値乱高下する神の留守
常備薬買ひ足しておく神の留守
- 澁谷瑠璃 ○生き別る片の手套は探すまい
サファイアの指輪外さずする夜なべ
柚子のみが泳ぐ狭小冬至風呂
飽きにけり冬眠しますルーティーン
- 石川智子 ○川浴ひは足早にゆく今朝の冬
柚子湯して寝息も夢もくるまれり
空冷えて嬉しくもあり柚子湯の日
北風に負けじと駅へ急ぐ道
- 原 晶如 ○散紅葉丹波に低き分水嶺
突くほどに寄り来る柚子をはなしけり
母恋ふる露風の詩や冬茜
きざはしに葉のやうに冬の蝶
- 青葉ひかる ○みかん入れゆず湯のつもり冬至まえ
虐められ苦しめられて尾花散る
百日紅最後の一葉翻り
山茶花の今年も咲きて可憐なり

次回「萩句会」

日時 2017年12月11日(月) 14時～17時

場所 下目黒住区センター第二会議室

兼題 『ポインセチア・猩猩木』一句 当期雑詠三句 計四句